

東魏における文学思潮：温子昇の文学を通じて

矢嶋，徹輔
九州大谷短期大学：講師

<https://doi.org/10.15017/9816>

出版情報：中国文学論集. 3, pp.1-12, 1972-05-01. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



東魏における文学思想

— 温子昇の文学を通じて —

矢 嶋 徹 輔

北魏王朝が北中国を完全に掌握し、強力な軍事力を背景に東晋以来の残留漢民族を支配すること約百年余、その間高度な中国文化は逆に胡族王朝に深く影響し、その胡族文化に著しい変質を与えた。特に、文学方面に視点を当てていえば、この王朝で文学隆盛の気運が大いに高揚した時期は孝文帝の治世、つまり太和年間であった。この聡明な英主は中国文化に深い憧憬を有し、国内的には儒学思想に基づく漢族伝統の国家政策を実施し、国外的には南朝あるいは辺境の異民族との抗争を極力抑えて国家統治の充実をはかった。かくして北魏の太和時代には平和が蘇り、皇帝自らの文学愛好と相まって、唐の李延寿が『北史』文苑伝で評するが如く、建国以来最初の北土における文学盛行の期となったのである。けれども、孝文帝の『移風易俗』つまり胡族国家から中国的国家への転身策があまりにも性急なものであったが故に、その政策の犠牲となり不遇をかこつていた北辺守備の胡族武人らの蓄積した不満が次第に表面化するよ

うになった。その結果、各地に反乱が頻発し王朝の絶対制はにわかに崩壊の兆しを示し始めた。この王権の衰退は直接太和年間の儒教リゴリズムに固められていた文学思潮を急速に南朝風文学思潮へと傾斜させていく要因となり、孝文帝の志向した漢魏の風骨を旨とする文学観はもろくも潰えさった。そして一たび崩壊への道を滑り始めると、もはやとどめるすべもなく、ついに五三五年北魏朝は一世紀にわたる栄光を残して東西に分裂した。東魏は北齊朝に禅譲するまでの十六年間、西魏は北周朝に代られるまでの二十二年間それぞれ存続した。

ところで、この北魏末から東魏にかけて、とりわけ才学の士として高名であったのが、「温子昇」・「邢子才」・そして「魏収」といわれる文人らであった。彼らは共にこの混乱の時代を巧みに生き抜き、「邢子才」と「魏収」は次の北齊朝にも仕え文壇の重鎮となっている。しかし、温子昇は北齊の建国基盤を形成した「高観」・「高澄」父子に重んぜられたものの、結局高澄に対する謀反の嫌疑によって誅され、東魏朝の滅亡の三年前にその生涯を終えた文人である。

さて、北朝文学全般に対する評価は、これを文学史的に鳥瞰すれば、必ず南朝文学の亜流に過ぎないとされ、一般的に軽視の目で眺められている。それは異民族支配という、いわば漢民族正統の王朝ではないことや、あるいは又従来儒教思想の束縛から脱皮し新たな文芸復興期にあたる南朝文学の特異な個性を有する文学思潮の隆盛のために、その陰の部分にならざるを得なかったという理由づけもできるであろう。しかし、南朝の視野の範疇で北朝文学を取り上げようとするのは、どうしても一面的な見解となってしまう。たとえ、北土の文学が南土の亜流に過ぎないというのが一般的通説であるとしても、やはり一応、北方そのものに視点を設定し、その視点を通して南朝の影響が一体どのように及んでいったかを考察すべきであろう。故に、この小論は、温子昇（字は暉拳）の文学に対して与えられた評価、という問題に焦点を当て、その問題を考察することによって、北魏の末、とりわけ東魏王朝を中心とする文学思潮の情勢を究明し、その思潮中で温子昇の文学創作の意識がいかに南朝の影響をこうむっていたかという点を明らかにすることを目的としたものである。

二

それでは、温子昇の文学に対してどのような評価がなされているであろうか。

その点について、彼とほぼ時代を前後する人々の、彼の文学に対する評語を述べてみよう。このことは裏面からいえば、北魏末から東魏にかけての文学思潮の傾向を傍証することにもな

り得るであろう。

まず、温子昇より年少であった、文才豊かな済陰王暉業（景穆帝の玄孫）の評価をあげる。彼は次のように評している。

江左の文人、宋に顔延之・謝靈運有り。梁に沈約・任昉有り。我が子昇は、以うに顔を陵ぎ、謝を轢り、任を含み、沈を吐く。（『魏書』温子昇伝）いささか、身内びいきのや

りすぎもよいところであるが、この讃辞を通して次のように考えられる。暉業が温子昇を南朝の有名な文人らと比較したことは、暉業自らの文学観はすでに南朝文学を十分に意識したものであり、その意識の下でなされる子昇の文学も当然南朝の文学の影響を受けているものと解していいのではないか。暉業が南朝の文学を好んだらしいことは、『北齊書』元文遙伝に

暉業、嘗て大いに賓客と会す。ある人「何遜集」を將つて初めて洛に入る。諸賢皆これを賛賞す。

と述べられていることから証明できる。さらに、暉業を中心とするサロンに集まる文人らが、梁の有名な文人であった何遜の詩文を賞賛したという事実から考えれば、北方の知識人らが南方の文学に対して強い憧憬を抱いていたものと推察できる。

又、梁の武帝が張臯という人物を北魏に遣わしたとき、張臯は温子昇の文章を筆写して帰朝し、その子昇の文章を読んだ武帝は、

曹植・陸機復た北土に生まる。恨むらくは我が辞人数弱まること 百六。（『魏書』温子昇伝）

と云ってなげいたという。武帝の文学観は、漢魏の伝統的な風骨を旨とする文学と、永明体や宮体という今様のきらびやかな

形式美を有する新体詩とを互に調和させることにあつたと思われ。この武帝が子昇の文章を、多彩と称される曹植や修辭を旨とする六朝の華美な文学の端緒を開いた陸機にたとえて評したということは、とりもなおさず、武帝自らの文学観に子昇の文章が合致したものであつたと考えられる。とすれば、子昇の文学それ自体がすでに南朝風の傾向を有するものと推論しても誤りではあるまい。

最後に、唐の張鷟著といわれる「朝野僉載」巻六に、

梁の庾信、南朝より初めて北方に至る。文士多くこれを軽んず。信、枯樹賦を以てこれに示す。後、敢て言う者無し。時に温子昇、韓陵山寺碑を作る。庾信読みてその本を写す。

南人、信に問うていわく「北方の文士いかん」。信いわく「ただ韓陵山一片の石有り、共に語るに堪申。」

という記述がある。これは、「北齊書」祖珽伝に

珽の弟考隱、魏末……散騎常侍となり、梁使を迎う。時に徐君房・庾信來聘す。名譽甚だ高し。魏朝聞いてこれを重んず。接待する者多く一時の秀を取む。

と記されている時のことであろう。とすれば、庾信三十三才の時であり、この頃には「既に盛才あり、文ならびに綺艶」（『周書』庾信伝）と称された如く、徐陵と共に宮体詩の代表的文人あるいは駢文の大家として、天賦の文才を充分に發揮した時期にあたる。だとすれば、庾信の文学意識の下でなされた温子昇の文学に対する評価は、云うまでもなく、精緻な修辭、対偶を旨とする華やかな南朝風の駢文と全く一致する作品であつたといふ証明となりうる。

以上、温子昇の文学に与えられた評価を三例挙げたが、このことによつて子昇の文学観はいずれも南朝の華美な文学思潮に深く影響されたものであつたと結論できよう。

ところで、このような評価を受けた彼自身の文学に対する創作意識はどのようなものであつたであろうか。

この点について、かつて彼が梁に使用した折、武帝の賓館で南人に対し、「詩章作り易きも、通峭為し難し」（『魏書』温子昇伝）と語つたということが記されている。これはつまり、詩文の創作そのものは比較的容易な事と思われるが、詞彩ある作品に仕上げることは至難の業であるという意味であり、彼のこうした発言の裏面に内在する文学意識は、すでに修辭を重んずる南朝文学への憧憬があり、さらには南朝美文を全く肯定しようとする意識そのものに外ならない。

三

さて、以上によつて、彼の文学が明らかに南朝の文学風潮の影響を繼承しているものであり、彼自身の文学創作の意識も南朝文学への志向性を有していたことが論証されたとすれば、次の作業として、子昇の文学作品そのものを検討してみなくてはならない。

まず、純文学としての詩と樂府について考えてみることにする。彼のこれらの作品について現存しているものは、詩が四首、樂府が七首（『全漢三国晋南北朝詩』による）の計十一首である。

その中より、幾首かを次に掲げてみる。

春日臨池

光風動春樹
丹霞起暮陰
嵯峨映連壁
飄飄下散金
徒自臨濠渚
空復撫鳴琴
莫知流水曲
誰辯遊魚心

詠花蝶

素蝶向林飛
紅花逐風散
花蝶俱不息
紅素還相亂
芬芬共襲手
葳蕤從可玩
不慰行客心
遽動離居歎

安定侯曲

封疆在上地
鍾鼓自相和
美人當窗舞
妖姬掩扇歌

光風は春樹を動かし
丹霞は暮陰に起る
嵯峨として連壁に映じ
飄飄として散金を下す
いたずらに自ら濠渚に臨み
空しく復た鳴琴を撫づ
知る莫し流水の曲
誰か辯ぜん遊魚の心

素蝶は林に向つて飛び
紅花は風に逐われて散る
花蝶俱に息わず
紅素また相亂る
芬芬共に手を襲ひ
葳蕤ほしいまに玩ぶべし
慰めず行客の心
なんぞ離居の歎きを動せん

封疆は上地に在り

鍾鼓自ら相和す

美人窗に当りて舞ひ

妖姬扇を掩いて歌う

これらの作品はすべて南朝風の作品であることはもはや疑う余

地がないものである。その他の作品、修辭に意をもちいた「擗衣」や「從駕辛金塘城」、樂府の「白鼻騮」なども南朝風のものである。（「全北魏詩」参照）これに對して、文學隆盛の太和時代の漢魏の風骨を旨とする文學觀を有した孝文帝に仕えた文人らの作品、例えば、獻文帝の第六子であつた彭城王勰の「応制賦銅鞮山松」、・祖壘の「悲彭城」、陽固の「刺讒詩」、・疾倖詩」という諷刺の詩、（常景には「擬劉琨扶風歌十五首」があつたと「魏書」常景伝に記されている。）、および太和時代の余風がまだ残存していた宣武帝の治世に氣骨と有していた文人の作品、例えば中山王熙の「絶命詩二首」、濟陰王暉業の「感遇」詩。これらの作品と子昇の作品とを比較すれば当然その趣が大いに異なっている点が明らかとなる。鄭振鐸がその著「挿図本中国文學史」で、宮廷文人としての子昇の文學を「都是南歌、看不出一点的北国的氣息出来」と評するのは、恐らく正しい指摘であろう。

次に、子昇の文章について考察してみよう。彼の文章（二十六篇が現存）については、駢文の大家、梁の庾信が大いに賞賛したということを前述したが、このエピソードは、子昇の文章がすでにすばらしい駢文であつたということの証明にならう。今、ここで彼の文章を實際に取り上げることはないが、便宜上「漢魏六朝百三家集」の「温侍讀集」あるいは「全後魏文」を参照すれば明らかである。清の李富孫学は、「漢魏六朝墓銘纂例」で、子昇の「常山公碑」を評して「碑詞駢偶」といい、又「司徒元樹墓誌銘」や「司徒祖瑩墓銘」を「文俱駢偶」と記している。さて、以上のように温子昇の文學作品を考察し、子昇が南朝

の影響を十分に継承した文人であったことを明らかにしてきた。ただ、ここで問題となるのは、北魏末から東魏にかけて南朝風の文人として存在したのが温子昇のみであるか否かという点である。もし彼のみであったとするならば、北朝における特異な文人として子昇を位置づけすることができる。しかしながら、常識的に考えたばあい、一人の作家のみが、ある種の影響を受けるということは考えられないことであり、その底流には、必ずや一定の文学思潮が存在したにちがいない。つまり、当時北土において、南朝の文学思潮が十分に普遍化されていたのではないであらうかというのである。この点について、例えば、第二章で、済陰王暉業が己れのサロンに集まる文人と「何遜集」をもてはやしたということを前述したが、このことは北方において南朝文学が相当に影響しつつあったということの部分的証明にはなると考えられる。そこで、北方における南朝の文学思潮の一般化という問題を証するために、子昇以外の文人の文学観がどのようなかを次に述べてみることにする。例としてまず、当時才学の士として最も高名であった邢子才と魏収の二人の文人を取り上げてみる。彼らは代表的な文人である故、ほぼ彼らについて語れば、当時の文学思潮がおよそのようなものであったかを明らかにできると考えられるからである。「温」・「邢」・「魏」の三人が有名であったことは、「北齊書」魏収伝に

済陰の温子昇、河間の邢子才と齊しく誉あり、世に三才と号さる。

あるいは「北齊書」邢劭（子才）伝に

済陰の温子昇と文士の冠たり、世これを論じて温・邢と謂う。鉅鹿の魏収、天才艶発なりといえども、年事二人の後に在り。故に子昇死後はじめて邢・魏と称さる。

と記されていることから証明できる。子昇と子才は年令的にもほとんど差はなく、ただ魏収は子才より十才ほど年少であったといわれる。彼ら三人は同僚として活躍した間柄であった。

邢子才と魏収の文学観を端的に示す資料として、「北齊書」魏収伝に

形邵（子才）又云う「江南の任昉の文体、本疎なり、魏収直ら模擬するにあらざるも亦大いに偷窃す」と。（魏）収聞いて乃ちいわく「ただ常に沈約集中において賊を作す。何ぞ意わん我任昉を偷むといはは！」、「任」・「沈」俱に重名あり、「形」・「魏」各々好むところあり。

とある。この論争の問題は、顔之推がその「家訓」文章篇でも記しているが、都の鄴で大いに評判をまき起こしたものであったといわれ、邢邵と魏収は共に南朝の大家の作品を好んだ人であったことがわかる。このように東魏朝で最も高名の文人すら南朝文学に親しんでいたという事実は、当時の北朝において、南朝の風潮が深く浸透していたという証明にもなり得るのである。さらに又、「北齊書」邢邵伝に

邵、雕蟲の美独り歩む。一文初めて出だすたびに京師これがために紙貴し。説諭にわかには遠近に遍し。

と記されているように、邢邵は南朝美文学の骨髄である修辭を旨とする技巧に意を尽くした文人である。「顔氏家訓」学問篇の中で、顔之推は、彼と同僚であった鄴下の邢邵について、「儒

学が得意であったが、一方ではやはり行くとして可ならざるなしといった多才な能力を有した者として有名であった」と評している。之推からすれば伝統的儒教精神を奉ずる人物として好感を抱いたものであろうが、「行くとして可ならざるはなし」の能力を有すと云わざるを得ないところに、前述の「雕蟲の美独り歩む」といわれるような南朝的風潮を継承している点をひそかに言及せざるを得なかつたのではないだろうか。

魏収については、前述の「邢邵伝」にいう「天才艶発」とか、又「魏収伝」に、「辞藻富逸」・「在途作聘遊賦、辞甚美盛」あるいは「雖富言淫麗而終帰雅正」などの評があり、又、前述の沈約の文章を自ら模倣していると言明している点などを考え合わせれば、当然南朝文学の影響を強く受けた文人といえる。

以上、「邢」・「魏」について述べたが、その他、邢邵と友人であった王昕という文人も、

好んで軽薄の篇を詠み、自ら脩楚を模擬す。（『北史』王暕伝）と北斉の文宣帝からいわれたという。脩楚とは南朝に対する軽侮の言葉であるが、とにかく南朝風の文学を好んだというのである。又、彼の弟の王暕も「吟詠情性、往々麗絶」（『北史』王暕伝）であったと評されている。

又、東魏の孝静帝（在位五三〇―五五〇）は、「帝文学を好み：孝文の風あり」（『魏書』本紀）と称され、しばしば群臣と詩文を楽しんだ天子であった。が、高澄の専横に「帝、憂辱に堪えず、謝靈運の詩を詠む」（『魏書』本紀）と記されている。皇帝自らも南朝の文学に親しんでいたものであろう。

以上のことから、当時すでに北朝において南朝の文学思潮が

十分に普遍化していたということが推察できる。とすれば、かくまでに南朝の影響が北朝に深く浸透していったのは、一体いかなる原因によるのであろうか。

文学思潮形成と普遍化の最大の要素は、文学史的に考察を加えれば、王侯貴族を中心とする権力者の主宰する文学サロンにある。

とすれば、次に考察すべき問題は北魏末から東魏にかけて、混乱する政界に身を処しつつ、己れの権力を背景に文学サロンを形成した貴門が南朝の文化（文学も含む）をどのように吸収していったかということであろう。

四

画期的な文学隆盛の期を将来した大和時代が過ぎると、七代目の宣武帝（在位四九一―五一五）が即位した。帝は孝文帝の遺命を受けた、六輔と称される六人の有力皇族に輔佐され、その結果大和の余風はまだ残存していた。しかし後半期に入り親政を行い、かつ熱心な尚仏者であった帝は、龍門の石窟の造営をはじめ多くの仏閣建立に莫大な費用を投入した。さらに又次の孝明帝（在位五一五―五二八）が六歳という年少で即位すると、帝の母である靈太后胡氏が摂政として臨朝、過度の仏教崇拜とそれにともなう奢侈生活に官廷の財政はますます窮乏していった。しかし、一方では西域から多くの仏僧が来朝し、それにともなつて異国の文化が将来され商業がめざましく発展した。その結果国内の経済は大いにうるおい繁栄の絶頂に達した。この情況については、『魏書』食貨志に

魏より徳すでに西域に広まり、東夷その珍物を貢ぎ、王府に充ち、又南において互市を垂立し、以て南貨・羽毛・齒革の属を致す。遠きも至らざる無く、神龜(五一八一—五一九)・

正光(五二〇—五二五)の際、府藏に盈溢す。

と記されている。さらに又この事は、北魏の楊銜之が「洛陽伽藍記」でも詳細に記述している。けれどもこの国内繁栄は朝廷内部を腐敗させる結果となり、国家の綱紀は著しく乱れた。魏収は「釈老志」で、

正光(五二〇—五二五)以後、天下虞多く王役尤も甚し。

と記している。このような情勢の中で、ついに孝明帝は靈太后との間に党争を起し、太后によって帝が毒殺されるや、この機会をうまく利用した、山西の大牧場主と称された爾朱榮が、太后及び王公卿士数千人を殺して、権力を掌握し専横をきわめた。その後、彼も自らが擁立した孝莊帝(在位五二八—五三〇)に誅されたわけだが、当時の事を、「魏書」邢昺伝は

孝昌(五二五—五二七)の後より、天下務め多く、世人吏の工みを以て達を取らんこと競い、文学大いに衰う。

と述べている。孝莊帝の肅清もつかのまのことで爾朱榮の一族に報復を受け、再び権力は爾朱氏の手にもどった。しかし、まもなく山東の漢人名族を中心とする爾朱氏打倒の軍事行動が起され、特に北斉朝を建国する基盤を形成した懷朔鎮民の高澄・高澄父子が抬頭し、爾朱氏を一掃した。しかし、もはや北魏朝は国内を統治すべき実権を有せず、ついに、五三五年に東西に分裂した。東魏の事実上の覇者となった高澄父子は、都を洛陽から鄴に移し、高澄の孫である高洋が北斉を建国するまでの

十六年間東魏は存続した。この期間は比較的平和が保持されたらしく、魏収は「魏書」儒林伝の序で

興和(五三九—五四二)・武定(五四三—五五〇)の世、冠難すでに平まり、儒業復光す。

と記している。又、西魏との抗争のため南朝と通和する必要性もあつたが故に、「魏書」孝靜帝紀に

蕭衍(梁の武帝)、益州刺史に因りて、和を伝え通好を請う。

と記されているように、南の梁の武帝との間で毎年必ず使節の交換が実施され非常に親密な友好関係が成立していた。それ故、南朝の文化は大いに北朝へ流入していき、その結果、再び北朝においては南方文化の刺激によって、文学面についても隆盛の氣運が高まり、ます／＼王侯貴族を中心とする文学サロンが形成されることになった。例えば、「北斉書」文襄(高澄)紀に
才名の士に至りては、みな薦擢し、仮にまだ顯位に居らざる者あるも、みなこれを門下に致きて以て賓客となし、
毎に山園の游燕に必ず招攜し、射を執らしめ、詩を賦せしめ、おのおのその長とするとを尽くさしめて以て娛適となす。

と記されている。東魏の実力者、高澄は文学サロンを聞き、そこに才学の士が大いに集まつたことが分る。高氏は元來胡族系で、北辺を準備する士人の家柄であり、文学的素養を有する環境にめぐまれていなかった。それ故、東魏の貴族として政治権力を保持していくためには、高氏を侮蔑し伝統的家系を誇る名族を抑えておかねばならないので、その方便として才学の士を周辺に集めておく必要性があつた。一方、政治的権力を保有

しない才学の人士にとってみれば、孝荘帝以来内乱で百官の俸禄が支給停止という状況におかれ、その生活基盤を奪われていたのであるから、高澄のような有力なスポンサーは、いわば彼らにとって救世主となり得るものであったであろう。ここに、相互の利害関係にもとづく強力な文学サロンの形成が実現できることになった。

又、「魏書」元羅伝には次のような話をのせる。

元又、当朝に政を専にす。(元)羅の望四海に傾く、時に才名の士、王元景・形子才・李樊らみな其の賓客となる。

あるいは又、「北齊書」邢邵伝にも、北海王昕の下で文人らが集まり、詩文を楽しんだことを記している。

さて、以上のような文学擁護者としての強力なスポンサーたちは、南方に対してどのような見解を有していたであろうか。

この点に関して、例えば高観に次のような言辭がある。

江東に復た一呉児老翁蕭衍なる者あり、専ら衣冠礼樂に事む。中原の士大夫これを望んで以て正朔の在るところとなす。(「北齊書」杜弼伝)

東魏の専横者、高観の梁の武帝に対する賛辭であるが、たとえ外交辭令だとしても、とにかく文化的に優越する南朝に対する憧憬の念がその言辭の裏面に存在していると解してよいのではなからうか。又、東魏の都、鄴では、

時に南北通好す。……梁使鄴に至るや、鄴下これがために傾動す。貴勝の子弟盛飾して聚觀し、礼贈優渥、館内市を成す。宴日、文襄(高澄)左右を使ってこれを觀さしむ。

という状況であったと「北史」李諧伝に記されている。当然梁

朝からの外交使節には高名の才学の人士が任命されるならわしであったことは申すまでもないことであるが、有名人士に対する群集心理による歓迎という現象を除いたとしても、決して南朝に対する憧憬の念が減じたとはいえないであろう。貴遊の子弟であればある程、己れの存在を価値あらしめるための教養として、新しい今様の南方文化を吸収しなければならなかったのである。北朝においてもっとも文化水準の高度な京都のこうした情勢は、まさに北土全体をおおう風潮であったと考えられる。

前述の如く、文学サロンを構成するスポンサーの意識は南方に向けられていた。その結果、そうしたサロンに集まる文人らの文学意識も自ら南朝への志向性を有するものになっていったことであろう。かくまでに北朝は南朝の影響を受けるようになったが、さらに又、その影響は北朝における清談の流行という情況を将来した。まず、「北齊書」崔贍伝に、北齊朝の名宰相と称された楊愔(字は遠元)が盧思道に崔父子の文藻の優劣を尋ねたとき、

思道いわく「崔贍、文詞の美は実に称すべきもの有り。ただ、世を挙げてその風流を重んじ、ゆえに才華没せらる。」(楊)愔云わく「この言理有り」。

という話を載せている。つまり、この「文詞」「才華」に対する「風流」というのは、まさに清談こそ指すものであり、「北齊書」裴讓之伝に

楊愔と友善す、相遇えばすなわち清談す。

と記されているように、楊愔は清談を好んだ文人である。それ故、前述の如く盧思道の返答を「この言理有り」と肯定するこ

とが可能であったのである。この清談が北土で大いに流行したという証明は、『北史』李諧伝の記述を例にあげればよいであろう。

天平(五三四―五三七)の末……この時、鄴下風流と言うもの(李)諧及び隴西の李神雋・范陽の陸元明・北海の王元景・弘農の楊遵元・清河の崔贍を以て首となす。

又、王侯貴族にも清談を好む者が出るようになった。例えば『北史』の臨淮王彧伝に

臨淮復た風流観るべきといえども、骨鯁の操無し。と記されている。

都の鄴で清談は流行したのであるが、これは当時の経済力伸張による文化頹廢の風潮、經学思想から文学面への離脱ということも当然考慮すべき問題であるが、一方、これを南朝の影響という視点に立つて考察すれば、天平以後の年代は梁の大同年(五三五―五四五)にすっぽりと収まってしまふ。この大同という時代は東晋以降衰退の一途にあつた清談論議が再燃しはじめた頃といわれ、『顔氏家訓』勉学篇に

梁世に沮んで茲の風(清談)聞く、老莊・周易總て三玄と謂う。武皇、簡文、躬自ら講論す。周弘正、大猷を奉賛し、化、都邑に行はる。学徒千餘、実に盛美を為す。

と当時の清談流行の現象が記述されている。とすれば、時を同じくして北朝において流行したという情況は、文化的に劣る北朝の人士がいかに南朝の文化的動向に意を用いていたかということを物語る。つまり、極端にいえば、文化水準の高い南朝での流行は即座に北朝に伝播したといひ得るであらう。

最後に、南朝の影響、いわば南朝文学の流入を証明するものとして、江南の民歌が北朝に伝わっていったことを記述して、南土の北土に対する影響という問題を終ることにする。

『魏書』樂志に

世宗(宣武帝)在位四九〇―五一四)寿春を定め、其の声役、江左に伝わる所の中原の舊曲を収む。……江南の呉歌、荊楚の四声、総べて清商と謂う。殿庭の饗宴に之を兼奏するに至る。

と記されている。

結語

以上、北魏末から東魏にわたる文学的風潮がどのようなものであつたかという問題を、温子昇の文学に対する評価と彼自身の文学観に視点を置いて、考察してきた。

大和時代の儒教倫理観に裏付けられた文学隆盛時期は、孝文帝の死によつてにわかに衰退の一途をたどりはじめ、その衰退の度合いを早めるかのように南朝の文学思潮は北朝に流入していった。一方、この情況を北朝から観てみるならば、北魏末の国内混乱によつて、国家は東西に分裂し、東魏の高観・高澄父子は孝静帝を擁立しながらその実権を掌握して大いに権力をふるつた。しかし、東魏が北斉に禅譲するまでの十六年間は、南方の梁との通好が結ばれ、梁の影響の下に再び文化的発展が希求された。特に、高氏は元来北辺の守備を行う胡族系の武人の家柄で、文化的教養を有していたのではなかつた。それ故、高氏一族が貴族社会の上に君臨するとき、もつとも必要であつ

たものはいうまでもなく文化的教養である。しかし、高氏一族にとつて、永年にわたつて継承されて来た漢族士大夫の奉ずる伝統的儒教精神に基づく文化を吸収し、彼ら自身の文化的教養を形成しようとするのは、およそ至難の業であつたと考えられる。むしろ、従来の保守的伝統を崩壊させるべき強力な新文化の形成を謀ることによつて、始めて伝統を持たぬ権力者が、伝統を有する者に対して抱くコンプレックスを解消させ、凌駕することが可能となる。とすれば、高氏一族が専横者としての地位を保持するための最良の方法としては、東魏に流行する南朝風の文化を吸収し、その普遍化を謀ることであろう。その結果、彼らは当然伝統を誇る胡族や漢族の士大夫を足下に置くことが可能となる。又一方、この点を政治的視点から考察すれば国内秩序の混乱に起因する保守的な門閥制の崩壊という現象を考慮せねばならないであろう。「北史」鄭述祖伝に、

靈太后、政を預かりてより、淫風や行なわれ、元叉權を擅にすること多し。法官糾正を加えず、昏宦時に貶無し。有識みな以て歎息す。

と記されているのは、まさに北魏末における門閥社会の解体に外ならない。このような政情は又高氏の抬頭を可能にし、胡族・漢族の名門貴族の上に君臨することができたのである。あるいは又、高氏は北辺守備の不遇をかこつていた鮮卑系の士人らの要望を荷つて覇者となり復たのである。彼らの不満というものは、孝文帝の儒教リゴリズムにのつとる中国的王朝の形成過程の中で、次第に恩恵を受ける機会が少なくなり単なる傭兵と

化してしまつたことに起因する。それ故、高氏は彼らの不満を解消せんがために徹底的に孝文帝の政策を破壊し、鮮卑族を優位とする国策を実施した。その結果、東魏は鮮卑語の使用、虜性に戻ることを許可するなど、胡族を優位とする政策を実施した。ここに太和時代の儒教的リゴリズムの拘束力は衰退し、新文化の享受は非常に容易なこととなつたのであろう。かくして、高氏一族は南方文化を積極的に吸収し、門閥社会のゆるみという時代の趨勢と相まつて文化的に北土を南風化していったといえよう。

高氏一族、とりわけ高澄(文襄帝)に引き立てられた温子昇であつたが、彼自身寒門の出という宿命を背負い、その宿命から少しでも離脱しようとするには、必然的に立身出世という方向をたどらねばならなかつたであろう。それ故、彼は生來の文才を唯一の拠所としてひたすら鬭争激しき官界の中を渡つていった。従つて、彼の文学は、常に己れの出世と保身の具として利用する外はなく、いわば、権力者に対するおもねりの文学であつた。彼は、己れ自身の思想を吐露するものというよりは、むしろ常に文章のアルチザンとして、己れの保護者のために創造していかねばならなかつたのではないだろうか。現存の二十六篇の文章は、詔が三篇、勅が一篇、章が一篇、表が八篇、状が一篇、銘が一篇、碑が六篇、墓誌銘が二篇、その他四篇と、ほとんど他人のために代作した公用文ばかりである。又、「北齊書」魏収伝に、

(魏)収、温子昇、全く賦を作らず、邢(子才)一両首ありといえども、又長ずるところにあらざるを以て常に云わく

会ず須らく賦を作り、始めて大才士と成るべし。唯章・

表・碑・誌は自ら許す。此の外は更に兎戯に同じ。

と記されている。大才の文人としてうぬぼれの強かつた魏収にとつて、温・邢と世に称されるのはなほだ不満であつた。それ故に、前述の如く、温・邢を暗に批判しているのであるが、ここで問題となるのは、温子昇が賦を一首も作らなかつたことである。その理由を現在明らかにすることは不可能であるが、子昇が影響を受けた文学的風潮は南朝梁のものである。とりわけ、東魏は梁の大同元年（五三五年）の一年前より始まつている。この梁の大同年代は、「隨書」文学伝の序に、

梁の大同の後より雅道淪缺し、漸に典則に乖き新巧を争馳す。簡文・湘東その淫放を啓く。

と記されているように、宮体詩が盛行した時期に当る。それ故、前述の如く、温子昇の純文学において宮体詩風の作品が現存しているのも必然的結果である。又宮体詩の盛行で賦は陰の存在になつてしまつていたのでなかつたか。思うに、子昇が賦を作らなかつたということは、梁の大同年間の文学的風潮をむしろ極端に継承していたからだとは考えられないであらうか。

又、魏収は温子昇の純文学を「兎戯に同じ」といつて難じたが、さすがに温子昇の章・表・碑・誌などの文章に対しては、これを認めざるを得なかつたようである。このことはかえつて温子昇が純文学に秀でた文人というよりも、文章家として称された人であつたことの証明となる。つまり、温子昇は己れの保身と立身のために専ら文章製作のテクニシャンとして存在した文人といえよう。

「魏書」温子昇伝にいう。

子昇、外には恬静、物と競うこと無し。言に準的あり、妄りに毀誉せず。

混乱の時世を生きぬく人間の処世観が明らかに読みとれる。

さて、温子昇はおもねりの文学を旨としたが故に、かえつて南朝の美文を充分に継承し、北土におけるその先駆者となつたといえよう。勿論、官界に身を置く文人として、世の矛盾を述べる詩句もいくつか見ることができが、彼の文学は、人間存在の内部矛盾から生ずる激しい自己の思想を展開したものであるというよりは、むしろ時の風潮にそのまま身をゆだね、南朝風美文を完成させるため、ひたすら修辭という技巧のために己れの意を用いたものとなつた、と考えられる。北魏末より東魏にかけて、三才の一人と称された温子昇ではあるが、彼の死後十年のちに北齊朝で重んじられた顔之推は、その「家訓」中で一言も彼の事を言及していない。魏収や邢子才についてはまだ存命中であつたという点もあつてか、彼ら二人の文学的活動を記している。この点は全く不思議なことであるが、裏面よりあえて推論すれば、儒教精神に基づく文学観を有する顔之推の見解からすれば、子昇の文学があまりにも南朝美文学の影響を受けたものであつたからであり、問題とするに足らないものとして否定しきつたと考えられないであらうか。

註

(1) 拙稿「北魏・孝文帝の文学観」(九州中国学会報第十六卷)

(2) これに関しては、森三樹三郎氏著「梁の武帝」(一三〇頁)にも言

及されている。

- (3) 丁福保著「全北魏詩」は、「韓」の字を「寒」に作る
- (4) この詩に対して、沈德潛は「古詩源」中で「略三謝(謝靈運・謝惠連・謝朓)の体有り」と評している
- (5) 間松林、松林経幾冬、山川何如昔、風雲與古同(「全北魏詩」)
- (6) 悲彭城、楚歌四面起、屍積石梁亭、血流唯水裏(同)
- (7) 丁福保著「全北魏詩」参照
- (8) 義実勳君子、主辱死忠臣、何以明是節、將解七尺身(「全北魏詩」)
平生方寸心、殷勤屬知己、從今一銷化、悲傷無極已(同)
- (9) 昔居王道泰、濟濟富群英、今逢世路阻、狐兔鬱縱橫(同)
- (10) 永熙末、聃入為侍読、與温子昇・魏収參掌文詔(「魏書」邢昺伝)
敕子才與散騎常侍温子昇撰麟趾新制十五篇(「魏書」孝靜帝紀)
- (11) 字都宮清吉氏詠「顔氏家訓」(平凡社刊・中国古典文学大系9)
- (12) 尤長釈氏之義、每至講論、連夜忘渡(「魏書」世宗紀)
- (13) 宮川尚志氏著「六朝史研究」148頁
- (14) 嘗與右北平陽固、河東裴伯茂、從兄臬、河南陸道暉等、至北海王昕舍宿飲相與賦詩。
- (15) 林田慎之助氏「顔之推の生活と文学観」(日本中国学会報第十四集)
- (16) 齊文惠王(高澄)引子昇為大將軍府諮議參軍(「魏書」温子昇伝)
文惠曰「我亦使子才・子昇」(「北齊書」魏収伝)文惠王に謀反したという疑いによつて誅された温子昇を葬つた宋遊道に対して、王の言として、「今卿真是重舊節義人、此情不可奪子昇、吾本不殺之、卿葬之、何所憚、天下人代卿怖者是不知吾心也」(「北齊書」宋遊道伝)